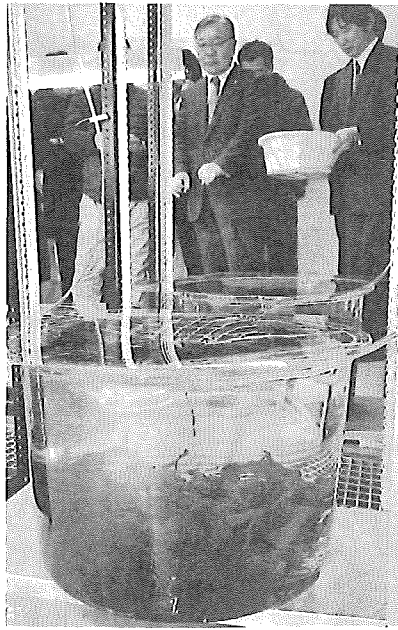


八雲町と北大タツグ 資源回復へ研究施設

海洋深層水を活用

水産ザバイバル

【八雲】渡島管内八雲町は22日、北大と連携し、日本海沿岸の漁業資源の回復を目指す「八雲町水産試験研究施設」を同町の熊石漁港内に開設した。水温が低く安定し、細菌も少ない熊石沖の海洋深層水を活用



海洋深層水を満たした水槽内で試験栽培が始まったダルス

し、ウニの成育改良や栄養分が多い海藻「ダルス」の試験栽培に取り組む。北大によると、自治体と同大の共同研究を目的とする水産試験施設の設立は初めて。熊石沖では海水温の変動などで、スケソウダラやイカの漁獲量が激減。海藻類が育たない「磯焼け」にも直面し、ウニやナマコの水

揚げが落ち込んでいた。八雲町は2003年、水深343メートルの海洋深層水の供給施設を同漁港内に建設したが、アワビ養殖などに用途が限られていたことから、北大の水産学部と大学院水産科学研究院(ともに函館)に技術支援

を要請。夏場も水温が5度を切る海洋深層水の特徴を、より幅広い漁業資源の活用につなげるため、新施設を整備することになった。施設は木造平屋約230平方メートル。総工費約7500万円は町が負担した。魚種

別に大小18の水槽を設け、海洋深層水を直接取り込む。身入りの悪いウニに人工飼料を与える陸上養殖や、海外ではミネラルが豊富で健康に良い「スーパーフード」として注目されるダルスの通年栽培を行い、事業化を目指す。メバルや

ソイなど近海魚も飼育。資源回復を図る多彩な研究を進め、地域の漁業に還元する。同日の開設式で岩村克昭(かつあき)町長は「小さな施設だが、1次産業の活性化につながる大きな一歩にしたい」と話した。(古田佳之)